

ミズベリング・ビジョンブック全体版：
ミズベリング WebサイトでPDF版公開中
<https://mizbering.jp/>
ミズベリング・ビジョンブックで検索

MIZBERING VISION BOOK

ミズベリング・ビジョンブック

ミズベリングの現場から見てきた水辺の未来



ダイジェスト版

「水辺利活用プロジェクトの進め方」編

ミズベリング・ビジョンブックとは？

ミズベリング・プロジェクト事務局が、全国の水辺の現場を飛び回り、いろいろな人びとと出会い、話し合う中で、見えてきたことをまとめた、水辺利活用・公共空間創造のためのテキストブックです。水辺のあり方は多様で正解というものはありません。ですが、想いがある人びとが出会い、夢やビジョンを共有し、まずやってみることから始めれば、あなたの地域の水辺はきっとよくなるはずです。ぜひ、ビジョンブックも参考としながら、地域の水辺でチャレンジを行なって下さい。

本ダイジェスト版では、ビジョンブック全体版からミズベリング・プラクティス「水辺利活用プロジェクトの進め方」の内容と全国の事例を抜粋し紹介しています。

ミズベリング・ビジョンブック全体版構成

1

ミズベリング・ムーブメント

ミズベリングとは？

ミズベリングとソーシャルデザイン

居心地良い場所は自分たちでつくる
市民主導の公民連携

まちと水辺

ミズベリング・プロジェクト事務局の役割

アドバイザー・ボード

2

ミズベリング・ヒストリー

3

ミズベリング・セッションメソッド

4

ミズベリスト・インタビュー

新居直さん
(特定非営利活動法人 新町川を守る会 副理事長)

泉英明さん
(都市プランナー・有限会社ハートビートプラン代表)

和田真治さん
(南海電気鉄道「なんば・まち創造部」部長)

田中謙次さん
(日野川流域交流会理事・環境文化研究所代表)

忽那裕樹さん
(ランドスケープデザイナー・E-DESIGN 代表)

竹家正剛さん
(和歌山市 市長公室 政策調整部政策調整課)

田中里佳さん
(国土交通省 大臣官房技術調査課／
元 水管理・国土保全局河川環境課)

5

ミズベリング・プラクティス

ミズベリング・ロールプレイ

水辺利活用プロジェクトの進め方

推進チーム編成

調査

戦略仮設構築

社会実験

評価

実装

6

ミズベリング・法制度

河川の使用

河川区域

基本ルール

占用主体

占用施設

各種基準

河川管理者の支援①

河川管理者の支援②

7

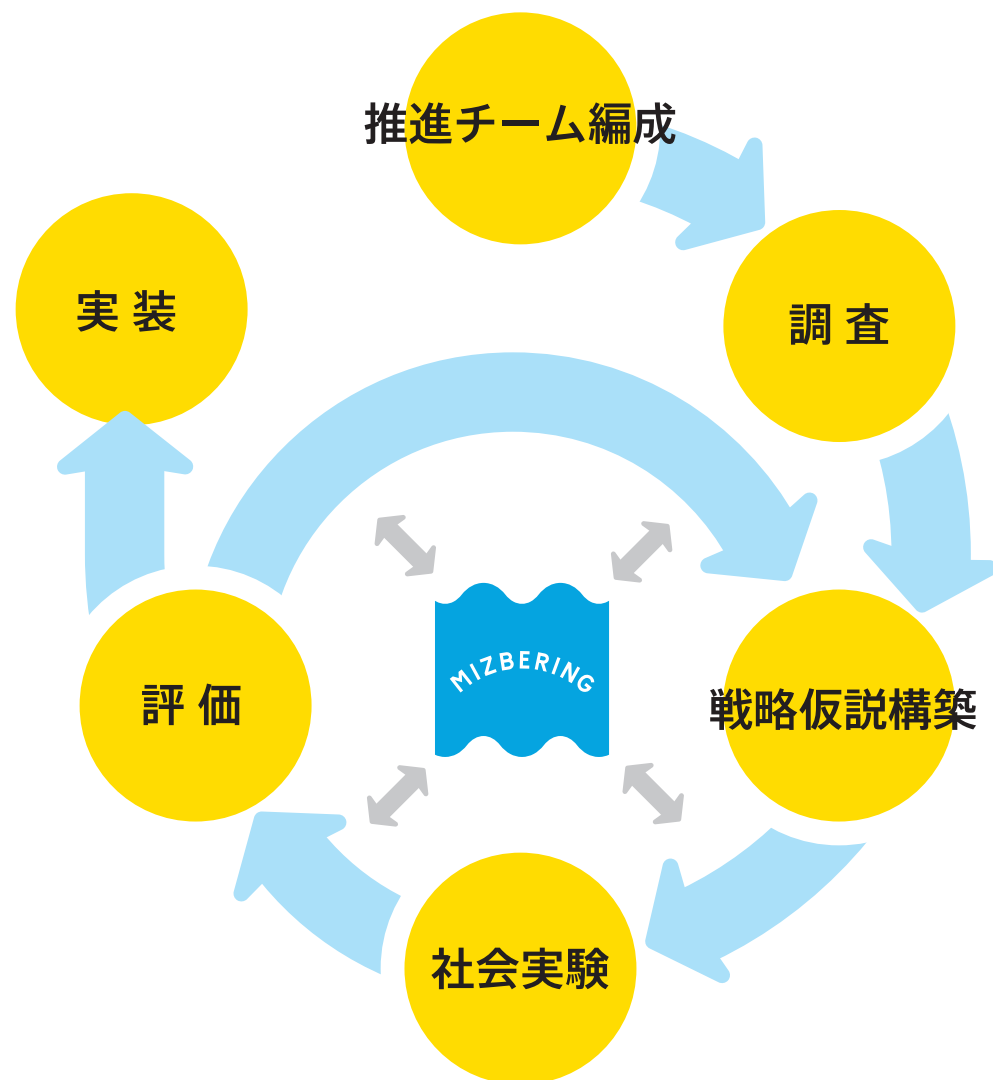
全国ミズベリング会議インサイト

全国ミズベリングご当地会議アンケート

水辺利活用プロジェクトの進め方

水辺のプロジェクトはとどまることのない、フィードバックの循環と心得よう。

動き出しながら、周りを巻き込み、反応を測定し、
徐々にプロジェクトの実現力を上げていこう。



ミズベリング・フィードバックサイクル

推進チーム編成

まず、みんなで水辺に集まって何かをやってみる。

まず知り合おう。互いにどんなことをやっている人なのかプレゼンしよう。そして、水辺への想いを語ろう。そんな中から、プロジェクトの芽が生まれ、関わりたいと思うメンバーが集まってくる。そのために、水辺で乾杯してみる、ボートに乗ってみる、ピクニックをしてみるなど簡単でいいので、アクションをしてみるのが手。ドラクエのチームのように、いくつかの異なったスキルや職能を持つキャラクターによるプロジェクト推進チームを編成しよう。

調査

水辺を取り巻く、社会条件と自然条件、そして人びとの声を知る。

該当する水辺に関わる法制度や歴史などの社会条件、洪水頻度や過去の水位などの治水条件、生き物や水質などの環境も含めた自然条件を把握しよう。また、もともと水辺で活動していたり、これから関わってくれる可能性がある人びとや組織、コミュニティを発掘しよう。人びとの声を拾うために、ミズベリング会議などいくつかのワークショップを行うことも有効。

戦略仮説構築

水辺とまちのビジョンを描いてみる。
実現するための手法も考える。

地域の人びとやプロジェクトに関わる人びとの声を聞き、ある程度情報が集まってきた段階で、みんなの望む水辺の未来や、欲しい水辺のまちのイメージを一度ビジョンとして描いてみよう。この絵は、あくまでも仮説であるが、方向性を示すことによって、多くの人にイメージが共有され、より多様な人びとを巻き込み、フィードバックを得ることが可能になる。また、ビジョンを実現するための制度や財源などの手法も同時に考えておこう。

社会実験

まずはできることから始めてみる。
多様な関係者を巻き込み、ビジョンを共有し、実現への気運をつくる。

机上の議論だけでなく、実現したい水辺のビジョンの一部を、小さいスケールでいいので、実際の河川空間や水辺で試してみよう。ポイントはまず簡単にできること、期間を区切って行うこと、効果を測定できることである。これらは社会実験として行政も巻き込み官民連携で行うことが望ましい。このような社会実験を行うこと自体が、様々な人びとを巻き込み、ビジョンを知らしめ、実現へ向けた気運を社会につくるための、効果的な手段となる。

評価

フィードバックを得ることが、
プロジェクトを育てていく上で肥やしとなる。

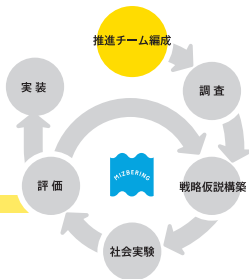
社会実験やイベントなど、具体的なアクションの実行は、いわば、水面に投じる石。その波紋がどのように広がり、どのような反応があったのか、様々なステークホルダーからのリアクションを記録しよう。フィードバックからは、プロジェクトがどうすればうまく進むのか、何が課題となっているのか、プロジェクト推進者にとって、貴重な気づきをもたらされるはず。フィードバックを的確に得るためには、あらかじめ目的、評価項目を設定しておくことも有効である。

実装

運用自体がフィードバックの一部。
変化に対応しながら、プロジェクトの質を上げていこう。

ビジョン仮説づくり→社会条件→評価のサイクルを回す中で、精度が高まったプランは実装に向けて踏み出そう。運用にあたっては、できるだけ現場情報のフィードバックを反映させることが可能な体制を設定しておくことが重要である。運用自体の中から、新しいイノベーションや空間利用のアイデアが生まれる。それを活かすことができるプロジェクトマネジメントが求められる。

推進チーム編成



事例① 水辺で乾杯

同じ時間、同じ空間で、飲みながら夢を語ることができるツール

「水辺で乾杯」は、7月7日午後7時7分に、水辺にて乾杯を行い、風流に参加者で風景を創出するイベントとして、全国各地の水辺で広く行われ、初夏の風物詩となりつつある。水辺プロジェクト立ち上げ前の、プロジェクトチーム編成という視点でこのイベントを捉え、7月7日にこだわらずにいつでも、やりたい時期に行えばよい。水辺で乾杯を行うことのメリットは、まずイベントを行うこと自体が、小さな社会実験のモデルとなっている点である。どこでどんな趣向で乾杯を行い、誰を呼ぶのか、告知のためにSNSにアップする画像やビラをつくってもいい。水辺でみんなが集まって乾杯することで普段とどう違う場や風景が生まれるのか、実験である。参加者の反応も様々であるだろう。

また、様々な参加者が集まり、これまで出会うことのなかった人びとにコミュニケーションが発生することも重要である。乾杯という気軽なイベントなので、大上段に構えることなく、いろいろな人びとを呼ぶことができる。これまでなかなか腹を割って話にくかった、行政担当と民間が同居したり、行政内でも部署を越えた人びとや、そもそも水辺に関心が無かった地域の人びとが、同じ場で話す機会が生まれる。そのゆるやかなコミュニケーションの中で、お互いにどんなことをやっている人なのかを理解したり、水辺の未来に関して考えている夢や妄想を、現地で語ることができるのである。あなたは、そんな貴重な機会を自らの手で作ることができるのだ。ともに集まって、乾杯し、同じ風景を見る。その中から言葉で話してもなかなか伝わりにくかったイメージも共有され、夢を語り合う仲間になっていくのは、そう時間はかからないであろう。

このような「水辺で乾杯」の多様な人びとと士の現地コミュニケーションから、夢やビジョンを共有することができた

ら、プロジェクトを行うためのメンバーが見えてくる。なるべく得意分野が違うメンバーが集まって、プロジェクトチームが編成されていけば、様々な局面に対応可能なチームに育っていくことができる。



水辺で乾杯を楽しむための3つのポイント

1. 開催告知しまくろう

イベント告知ができるWEBサービスやSNSをフル活用！ニュースメディアに告知するのも手だ。

2. 最高の乾杯をつくろう

世界で一番面白い乾杯写真をみんなで撮る意気込みで企画してみよう！

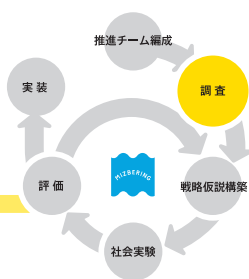
3. 不思議な一体感を味わおう

7月7日夜7時7分、世界中で乾杯してる人たちと一緒にはいないけど気持ちが一つになってるこのひと時を楽しもう！



真田武幸さん
(ミズベリングディレクター)

調査



事例② 和歌山市水辺まちづくり調査

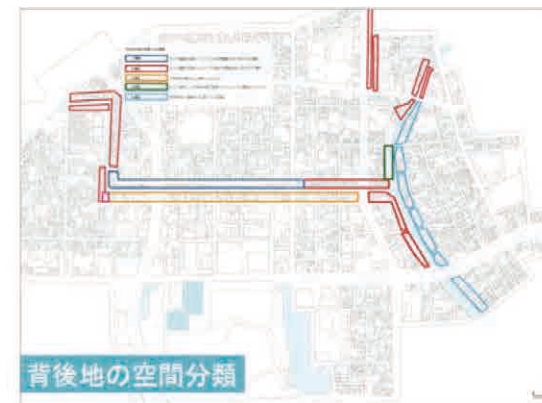
空間の履歴、ステークホルダーのインタレストを踏まえた上で、利活用の可能性を見極める。

和歌山市では、中心市街地の市堀川の水辺空間を生かしたまちづくりを検討するための調査事業として、2016年度に、履歴調査、水環境調査、利便施設調査、水辺の遊休公共資産調査、来街者調査、ステークホルダー調査が行われた。

履歴調査では、河川空間と背後地での利活用の可能性を探るために、歴史的な観点から空間における履歴を分析し、来歴による水辺の空間分類がなされた。その結果以下のことが分かった。現在、水辺の遊歩道として整備されているところは、空間分類で「もともと河川や道路であったところが公共に払い下げられた場所」、また「江戸時代に土塁であった場所」を中心としている。その一方で、遊歩道として整備されているが通行不能なところ、また遊歩道として整備されていないが

歩けるところは、「民間地に払い下げられた場所」であり、民有地の前は歩行者空間になりにくい傾向があった。特に、通行不能なところは、戦後、戦災者が占用許可を得て護岸を建設した場所であり、民有地と地先の結びつきが強く残っていた。また、道路から水辺が見えるところは、現在でもオープンスペース的な利用が可能な、河岸の伝統を引き継ぐ公共空間として抽出できた。このように、利活用の観点からポテンシャルが高い水辺区間を、過去の履歴を読み解くことで、抽出したことがポイントである。

水環境調査は、紀の川の導水事業も含んだ、市堀川の水循環システムを明らかにした上で、水質の歴史的変遷と対策のあり方、合流式下水道と生活排水による水質悪化状況などを把握した。来街者調査では、水辺の近くのまちなかで行われているイベント時に、誰が、どのような手段で、どこから来たのかを把握し、今後の水辺活用時の来街者の傾向を予想する上で役立てた。ステークホルダー調査は、自治会、不動産オーナー、飲食店オーナー、環境系関係者、イベント主催者、近隣住民、治水管理者など50人近くに対してヒアリングを行い、それぞれの水辺利活用に関するインタレスト（関心と懸念）の分析を行なった。



水辺の土地の歴史による類型	
1 類型	かつて道路や水路だったところが公共空間に払い下げられた場所
2 類型	かつて道路や水路だったところが個人や民間に払い下げられた場所
3 類型	江戸時代に築かれた土塁だったところ
4 類型	かつて河岸だったが年月を経て民家になったところが整備されたところ
5 類型	江戸時代から建物が川に面している区画



空間の履歴による水辺背後地の空間分類

水辺空間のキャラクターを把握するための3つのポイント

1. 履歴の上に今がある

歴史の履歴から今を捉え直すと、目の前の空間がなぜそういう使われ方をしているのか理由がわかります。

2. 資料を読み込む

行政の刊行資料、報告書、歴史書、地域の図書館や資料館、様々な資料からファクトを浮かび上げらせましょう。

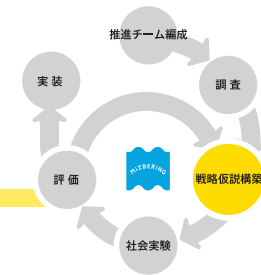
3. ヒアリングを大切に

地域に暮らす人、活動している人、専門家、自分よりよく知っている人に聞いてみましょう。



滝澤恭平さん
(水辺総研取締役、プランナー、編集者)

戦略仮説構築



事例② ミズベリング佐賀 | さがクリークネット

わいわい!! コンテナで街なかに人のアクティビティを取り戻した
佐賀の中心市街地が次にフォーカスをあてたのは、
全長 2000Km にも及ぶ、クリークだった。

佐賀市の中心市街地呉服元町に人通りが戻り始めている。それはわいわい!! コンテナとよばれるコンテナが置かれた芝生が敷かれた広場を中心にして、クルマ中心のまちから人にやさしいまちに変貌を遂げてきたからである。

子供から大人までが滞留できるように配慮された広場「わいわい!! コンテナ」は駐車場ばかりの人にやさしくないまちから人にやさしいまちへ変貌をとげる先鞭をつけるためにうまれた。ひとが安心して歩ける場所になることで中心部があらたな価値を身につけ、コミュニティが生まれ商売がうまれてきた、好事例である。

都市計画の分野でたいへん注目をあつめるこの佐賀を盛り上げる取り組みが次に選んだのが、佐賀市内をくまなく張り巡らされたクリークと呼ばれる水路の水辺を魅力的にすることである。

ミズベリング佐賀は、さびれてしまった中心市街地をどうかしようとするまちの戦略の一環として立ち上げられたプロジェクトである。かつては治水や水運、防災など、生活にうるおいをもたらしてきた佐賀のクリークは高度経済成長による都市の拡大やモータリゼーションの到来によって忘れられてひっそりとまちなかに存在してきた。一方、そのクリークの清掃を市民がずっとボランティア活動として全町内会をあげて行ってきた歴史も今日まで続いてきた。その魅力を再発見し、新たな使い方を模索し、その使い方が定着することで水辺がもっと魅力的になることがミズベリング佐賀の取り組みである。そしてそれは、佐賀の中心市街地の再生における最終目標「中心市街地に住む人や楽しむ人が増えること」

と連動している。水辺がその中心市街地再生の戦略の中でどの部分を担うか、ミズベリング佐賀における仮説の構築は明確である。

そして、戦略は立てることよりもその戦略がきちんと実効性のあるものになっていることが重要である。戦略がただの絵に描いた餅にならないようにするためには日々の活動が重要である。また、ただ単に一部の人だけが盛り上がっているだけではなく、多くの人々の共感を呼ぶ活動になっているかどうかが重要である。



未来のクリークイメージ MAP



西村浩さん
(株式会社ワークヴィジョンズ代表/
さがクリークネット)

ミズベリング佐賀における、
戦略を実効性のあるものにするためのポイント 3 つ

1. まずやってみることで可視化

さまざまなクリークの使いこなしのイベントを実施することで来るべき将来の風景をつくり、その魅力を共有する。

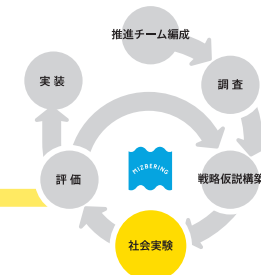
2. 自分たちが達成したい未来の仮説をわかりやすい表現で絵にして可視化

達成したい未来を絵にしている。親しみやすいタッチの絵にしているところがポイント。

3. 人と人の関係性を大切にしていること

メンバーが一軒一軒足を運んで描いたビジョンを共有しており、地元の信頼が熱い状態で推進されている。

社会実験



事例② 岡崎市乙川「おとがワ!ンダーランド」

殿橋テラスの社会実験における河川沿い飲食店利用に向けたステップアップ

岡崎市では、官民連携による乙川の賑わい創出に向けた試みとして 2015 年に「おとがわプロジェクト」を立ち上げ、持続的な都市経営を実現させる戦略として「QRUWA」を定めることで、公共空間活用と民間投資の誘発を図っている。

特に乙川では、2015 年に「かわまちづくり支援制度」登録と「河川敷地占用許可準則に基づく都市・地域再生等利用区域」指定がなされたことを契機に、水辺活用の可能性の模索に向けた社会実験として 2016 年に「おとがワ!ンダーランド」が実施された。この取り組みは、公募・選定された 34 のプログラムと水辺活用を促進する自主事業を河川敷や水上で実施するものであり、「NPO 法人岡崎まち育てセンターりた」と「有限会社ハートビートプラン」が企画運営を担っている。

また、水辺活用の拠点としては川床「殿橋テラス」の設置が検討されたが、計画高水位以下にテラスを設置した場合は、増水時の河積阻害となり、流下機能の低下につながる恐れがあった。そこで、橋台の下流側にテラスを設けることで河積阻害の極小化を図るため、専門家と検証を重ね、愛知県と岡崎市との協議の結果、「増水時には然るべきガイドラインに基づいて設置物を撤去する」との条件で占用許可が下りた。

殿橋テラスは、飲食営業の事業性検証や河川敷への集客・

誘導などに活用された。設置期間中には水位上昇による撤去が何度か生じたが、いずれもガイドラインで定められた時間内で撤去がなされた。社会実験の結果、殿橋テラスでの賑わいが河川敷への広告・誘導効果を生み出すことが示された一方、河川敷での事業は天候に左右されやすく増水時の営業ネットワークが生じることも明らかとなった。また、殿橋付近の水位上昇の予測値と実測値に差が生じていることもわかり、ガイドラインの見直しが検討された。こうした乙川の取り組みは、治水面に重点が置かれがちな河川において、社会実験を通じて水辺の賑わい創出に向けた経年的なステップアップを図る試みといえる。



水辺とまちを連動して社会実験する 3 つのポイント

1. まちと川を結ぶ回遊動線「QRUWA」

河川のみならず公園、道路、図書館など、まちなかの公共空間を有効活用して、まちの魅力を高めてつなぐ回遊動線の設定

2. 通過する人を水辺に誘う接点づくり

道路と河川敷の高低差により認識されにくい水辺アクティビティに誘う通過交通との接点「殿橋テラス」の設置

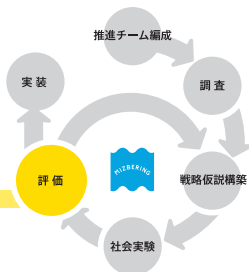
3. 水辺の滞留を促す居場所づくり

水辺の景観と心地よさを味わいながら滞留を促す、上流の木材を使った縁台「乙床」の設置



天野裕さん
(NPO法人岡崎まち育てセンターりた・事務局長)

評価



事例① 大阪市土佐堀川「北浜テラス」

水辺利用への情熱をもった地域力から発展した地域主導型の川床

大阪市土佐堀川には、堤防上に鉄骨で足場を組み、ウッドデッキを張った構造の川床が設置され、「北浜テラス」として特有の賑わいを生み出している。この取り組みは水辺への想いを強く抱く地元住民やビル・テナントのオーナー、水辺や大阪のまち魅力づくりに取り組む NPO・市民活動の有志が集結し、川床実現に向けて地域へのヒアリング、関係部局や河川空間・後背地の現況リサーチを行い企画案をまとめた。

そして他の沿川ビルや店舗オーナーに参加を募ったところ、三軒のビル・テナントが参加して 2 度の社会実験を実施することができた。この実験ではビル・店舗オーナー自身が川床の魅力を体験すること、地域主体の体制・運営に関わる様々なルール、水辺の開放感・景観を損なうことなく、快適かつ安全に利用できるためのデザイン案の有効性を確かめる目的で実施し、多岐にわたるルールづくりに必要な成果と課題を明らかにし、地域や河川管理者の共感・合意を得るための実績を得ることができた。

2009 年には、中之島水辺協議会の承認を通して、大阪府から占用許可を受け、常設の川床設置が可能となった。これ

を支えてきたのが建物所有者やテナント、市民団体、近隣住民などの地元の水辺への情熱ある人びとで構成された「北浜水辺協議会」である。協議会では、建築やまちづくり、不動産に関わる人びとがもつ、水辺の利活用に関するノウハウや経験値を活かし、沿川建物の状況調査やビル・テナントオーナーの発掘、デザインガイドライン作成、関係各所との協議など、川床実現のための役割を担ってきた。この協議会は、主に川床を設置使用するオーナーらの年会費で運営されており、川床設置も自らの費用により行われているため、必要以上に費用がかさむことは川床事業の新規参入に対して大きなハードルとなる。そこで設計や建設コストを抑制するため、関係各所と協議を行い、建築基準法の適用を受けない工作物として、必要最小限の許認可手続きによる設置が可能となった。

2009 年に 3 店舗の営業から始まった北浜テラスは、2017 年末には 15 川床 14 店舗まで増加しており、北浜地区特有の水辺の風景をつくり出している。こうした地域主導による水辺の利活用を通して、水辺を有する地域がその場所の価値・魅力を理解し、その利活用方法を地域内で共有し、その実現に向けた実施体制を構築していくことが必要不可欠であることがわかる。



地域主導の川床実現に向けて評価を行う 3 つのポイント

1. ビジョン共有

現状の検証や実証から課題を把握しつつ将来像を描き、常に達成したい未来としてステークホルダーたちと共有する

2. 役割分担

官・民、地域の人・外野の人など関わる人の専門性や優位性を最大限活かしたプロジェクト推進を図る

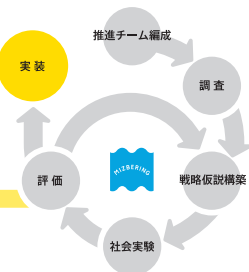
3. 巻き込み

活動内容や実験の成果などを広く地域に知らせつつ、時には意見を交わしながら緩やかな合意形成を図る

松本拓さん

(北浜水辺協議会・理事、水辺の建築家協会会長)

実装



事例① 広島市京橋川・元安川「水辺のオープンカフェ」

水辺のオープンカフェの実装に向けた河岸緑地の空間利用と管理運営の仕組みづくり

広島市では、2003 年に市民と行政の協働により「水の都ひろしま構想」が策定され、河川を活用した映画祭やカヌー教室などが展開されてきた。こうした取り組みが評価され、2004 年には「河川敷地占用許可準則に基づく都市・地域再生等利用区域」に指定され「水辺のオープンカフェ」事業が実施されるようになった。

水辺のオープンカフェの河川敷利用は、河川沿いの建物の地先（民有地）を河岸緑地（公有地）と一体的に利用した「地先利用型」と河岸緑地（公有地）に新たに建物を設置した「独立店舗型」に大別される。河岸緑地は河川管理者である広島県から広島市が占用許可を受け管理運営を担っており、こうした複雑な組織間の関わり方を解消するため、市民や企業、学識経験者、行政で構成される「水の都ひろしま推進協議会」が主体となり、出店者の公募選定や関係者間の意見調整を行っている。出店者は、店舗周辺の緑地整備を行うための事業協賛金を設置面積に応じて支払い、加えて、周辺の日常的な清掃活動も義務付けられている。このように、水辺のオープンカフェは継続的な水辺環境整備・管理運営のための仕組みに基づき運用され、河岸緑地周辺は日々賑わいが生み出されている。こうした賑わいの効果としては、不法駐車・駐輪の改善や事業協賛金により設置された電灯による深夜帯の防犯効果が挙げられている。

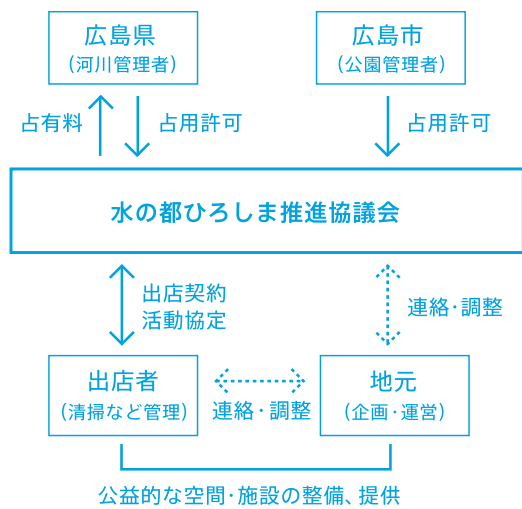
こうした水辺のオープンカフェの利用者数は年々増加傾向にあり、特に独立店舗型については、2016 年～2017 年にかけて店舗や貸出床の増加がなされた。2017 年現在、水辺のオープンカフェは、地先利用型が 4 店舗（京橋川）、独立店舗型が 6 店舗（京橋川 5 店舗、元安川 1 店舗）営業しており、さらなる賑わいづくりの発展が期待されている。その一方で、店舗の立地に応じて集客が見込めず閉鎖する店舗も存

在する。水辺利用の実装のためには、空間利用や管理運営の仕組みづくりを踏まえ、その成果のフィードバックを反映させていく必要がある。



< プロジェクトの仕組み >

広島市水辺のオープンテラス事業の体制



※ 広島市からの聞き取りやHPを参考に編集しています。

持続可能な水辺オープンカフェを行うための 3 つのポイント

1. 河川敷利用に対する規制緩和

民間資金による公共空間整備が実現できるよう河川敷利用に関する規制緩和措置の導入

2. 持続的な河川敷の利用・管理運営の仕組み

日常的な清掃活動などの官民協働による河川敷利用・管理運営体制の導入

3. 水辺の賑わい創出による水辺環境の改善

日常的に人びとの水辺への来訪機会を生み出すことによる水辺環境の改善



山本将矢さん

(広島市経済観光局 観光政策部・おもてなし推進担当課長)